

収録・解説 酒井董美

語り手 山口忠光さん
(明治40年生まれ)

昭和63年8月19日収録

あらすじ

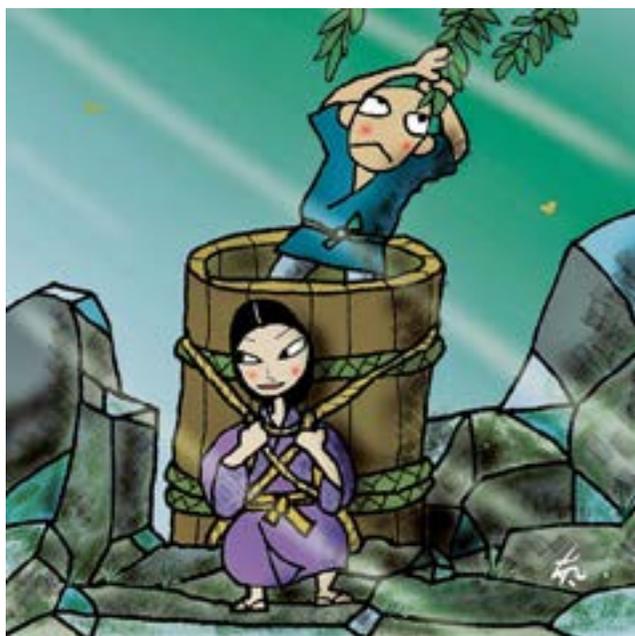
昔、1人暮らししてた男がおったけど、その男は欲ばりだった。

あるとき、「わたくしは飯も何にも食わいでもええけえ、嫁さんにしてください」と来た女がいたので嫁にした。

何日たっても飯を食へないので、ある日、「おれあ、ちょっと用があるけえ出てくるけえ」と出たふりをして、あまだへあがってのぞいて見たら、その女が釜いっぱい飯を炊いて、そこから髪を分けて、その中へ飯を取っては入れ、取っては入れして、そこから髪を

食わず女房

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

全国各地でよく聞く昔話

元の通りにしてしまっ

ら顔で戻って、明るく「まあ、帰りますけえ」と、その女が休憩し二度と蜘蛛の化けは来な日に「長いことおってもと女は言ったと思ったたところの上の方から木らったが、おまえ、いんら、その男を桶の中へ投で「せ」と言った。げ込んで山の中へ入った。その男は桶から出よーと浮き上がった、やと助かった。そいから、「どこ行くだけえ、それでよう覚え

た。「やっぱりこいつ、蜘蛛の化けだったか。しから買あちやる」と男は桶たが、「まあ、ちよとーと後をつけたら、奥もどった、もどった。おまたたちにええおかずを取ってもどったけど」

解説

「やっぱりこいつ、蜘蛛の化けだったか。しから買あちやる」と男は桶たが、「まあ、ちよとーと後をつけたら、奥もどった、もどった。おまたたちにええおかずを取ってもどったけど」

語り手の山口忠光さんの話では、魔物を退治する茅について「昔は山を

そいから桶を見たらな焼いていたが、焼かないので「ありゃ、どっか所の茅がよい」と話しておられる。

まあしかたがない」と。とところで、関敬吾『日

そうしていたら神様のお告げに、「あの女房は

蜘蛛の化けだけえ、それで旧の五月の節句にゃ

菅蒲と蓬と茅と一緒に

くくって、屋根へ飾ると

け。そうすりゃあもう来

んけえ」と言われた。

「こりゃありがたいこ

とだ」と思って、男は家

へ帰ってすべやったら、

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日に掲載)